



整備工場まで運んだ新車

{約37万台}

総合埠頭 車両部車両現業グループ 係長

仕事 on

小田巻 幸子さん(46)

自動車の輸入台数が全国1位の愛知・三河湾。岸壁に臨む専用駐車場には、船から陸揚げされたばかりの約3千台の車が整然と並ぶ。フォルクスワーゲンを中心に、アウディ、ボルシェ、ランボルギーニ……。扱うのは、世界に名だたるブランド車だ。

納車を心待ちにしているオーナーのもとに届けるため、そこから整備工場まで一台一台、ハンドルを握って運ぶのが仕事だ。現場監督の一人として、ベテランから新人までを束ねたチームを率いながら、みずからも1日に平均約70台を輸送する。20年間のキャリアで整備工場まで運んだ車は、約37万台にのぼる。

駐車場からフォルクスワーゲングループジャパン(愛知県豊橋市)の工場まで、私設の道路で約1キロしかない。だが、短い道のりの運転を難しいものにしてのいるのが、視界の悪さや気温などの悪条件だ。

輸入車は全て、傷を防ぐためにプラスチック製のカバーで全体を覆われている。そのため運転中の視界は、ほぼ前方のみ。雨などで天候が悪ければ、危険度はさらに増す。また、夏場は車内温度が70~80度まで上がることも。輸送中はホコリが入らないように窓を閉める上、エアコンは必要最小限のため、暑さに負けない集中力がある。

事故や急ブレーキなどによる車へのダメージを防ぐため、車の特性をつかんだ運転をする必要もある。扱うメーカーや車種は幅広く、排気量など仕様の違いも含めれば約30種類。ブレーキを踏むタイミングや、アクセルの効き方、ハンドルのあそびなどが、それぞれ異なる。新車の場合も練習走

視界は前のみ 特性つかみ事故ゼロ

行はできないため、すべて実際の輸送を通じて体に覚えさせている。

輸送時は、チームで4台ほどの車列を組み、その先頭車に乗り込んで安全に気を配りながら工場に向かう。車に傷をつけないのは大前提だ。「自動車は、お客様からの大切な預かり物」。毎日の朝礼で、メンバーと声に出す。これまでに事故を起こしたことは一度もない。単に輸送するだけではなく、運転しながら車の不具合に気づき、届けた整備工場に報告したこともある。

現場監督として知恵も絞る。駐車場にピシッと敷き詰められた車列から、運ぶべき車をどう出すか。前後の車間はわずか30センチほど。駐車場の図面と向き合って鉛筆を走らせ、車を出す手順や通路を考える。効率良く出さないと作業員の残業にもつながるため、搬出計画づくりは「パズルを解く」ような作業でもある。

小学生の時から続けるバスケットボールでは、全国大会に何度も出場した。誰よりも動くため、職場では「アスリート」と評される。この仕事も似ている。限られた人員と時間の中で、工場というゴールを目指す。1人では達成できない、まさに「チームプレー」だ。

この20年間で、職場は大きく変わった。かつては男性中心だったが、フレックスタイム制の導入などもあって女性も増え、今では従業員17人の半数近くを占めるように。育休を取るドライバーも出てきた。現場を束ねるリーダーとして、事故ゼロだけでなく「作業員の働きやすい環境づくりも続けていきたい」と話す。(佐藤英彬)



陸揚げされた輸入車に乗り込む小田巻幸子さん。窓の大半が傷を防ぐためのカバーで覆われている。愛知県豊橋市明海町、谷本結利撮影

運転好き 六つの免許

仕事のみならず、プライベートでも車の運転が好きで、学生時代には北海道を1周したこともある。この仕事を始めたばかりのころは、自家用車で練習に励み、今ではどんな車でも駐車スペースに前後左右を等間隔に停車させる技術を身につけた。普通免許のほか、大型、大型特殊、牽引、普通二輪、大型二輪の免許も持っている。

制服のボタン 内側に

新車を傷つけないよう、外側にファスナーの金具やボタンがない制服を着用している。面ファスナーで止めたり、生地の中にボタンをしまったりしている。夜間の事故防止のため、反射材も縫い付けてある。

プロフィール

おだまき・さちこ 静岡市出身。大学卒業後、名古屋のスポーツ用品店の営業職を経て2000年に入社。スポーツ全般が趣味で、中学・高校時代はバスケの名門・常葉学園で全国大会にも出場した。